（1）1969年2月25日
昭和44年1月10日・第三種郵便物認可

第8号

★激化する世界危機を世界革命へ！　プロレタリア日本革命をアジア革命の勝利と世界革命の突破口とせよ！

★全ての工場・職場・学園・地域に
安保粉砕の大衆行動委員会をつくれ！
★大衆行動委員会の中に実力防衛隊を組織せよ！
★基地包囲・街頭制圧・工場占拠・
学園占拠のゼネストで安保を粉砕せよ！

前衛

★安保ゼネストをプロレタリア日本革命の
突破口とせよ！
★資本家政府打倒・米軍追放・沖縄人民解放
労働者人民権力の樹立・労働者人民の武装！

毎月10・25日発行
発行　「前衛」編集委員会
発行人　杉村宗一
連絡先　振替「東京44589番前衛社」
千代田区飯田橋3—1—6飯田町ビル
前衛社　TEL（264）5079
購読料（予共）
1部　20円
20回　400円

四月闘争の前進のために

大衆闘争と遊撃戦の結合へ

一、四月闘争の任務

全国の労働者学生諸君！

七〇年をあと一年にひかえた六九年階級闘争は、東大・日大をはじめとする全国学園占拠闘争にたいする国家権力・機動隊の一大攻勢をもって開始された。

なぜか。

七〇年をめぐる日本の安保階級闘争は、六七年の羽田闘争にはじまる実力基地闘争が大衆的な学園占拠バリケード戦へと波及し、それがさらに労働者大衆の職場占拠闘争に波及しはじめるというかたちで発展してきたからであり、六八年秋の一〇・二一新宿占拠闘争以後、学園占拠闘争こそが、日本の大衆的反乱闘争の先頭にたってきたからである。

つまり、ブルジョア支配階級・国家権力は、大衆的反乱闘争の先頭にたっている学園反乱を押しつぶし、それをふくろだたきにすることによって、いまようやくにして巨大な反乱闘争へとたちあがろうとしている労働者大衆を威嚇しようとしているのである。

だから、一—三月の学園大攻撃は、一〇・二一新宿騒乱罪発動を突破口にするかれらの街頭大攻勢の第二幕であり、街頭制圧戦と学園占拠戦を先頭にして巨大な反乱闘争へと向いつつある日本の安保階級闘争全体にたいする「法と秩序」の先制攻撃なのだ。

全国の労働者学生諸君！

七〇年へ向けての安保階級闘争は、こうした敵権力の治安攻撃のまっただなかで、この四月に重大な局面をむかえようとしている。

四・二八沖縄闘争、それと前後して山場となる春闘、三里塚ボーリング阻止闘争、学園治安立法の策動、等々がそれだ。

しかも、この四月闘争は、六月の外相訪米阻止闘争、六・一五闘争、安保破棄通告闘争、アスパック粉砕闘争へと直接につながっていく一連の連続闘争の出発点だ。

かりにこの四月闘争で現在の敵権力の大弾圧攻撃をまきかえしあらたな攻勢への突破口をつくりだすことができないとすれば、日本の安保階級闘争は、重大な六月闘争への展望を見失ない、ひいては秋の佐藤訪米阻止闘争はきわめて困難な局面にたたされざるを得ないであろう。

二、突きあたっている壁は何か

全国の労働者学生諸君！

六九年階級闘争の帰趨は、まさにこのようにして、四月—六月闘争にかかっているのだ。

そして七〇年闘争の命運は、この六九年闘争の帰趨にかかっているのだ。

われわれは、なんとしても四月闘争で現在の敵の先制攻撃に歯止めをかけ、四—六月闘争への大衆的な突破口をつくりださなければならない。

まさにそれが、安保階級闘争の要求する四月闘争の任務なのだ。

全国の労働者学生諸君！

だがわれわれは、この任務を果すためには、日本の安保階級闘争が今日つきあたっている壁がどのような性質のものか、もういちど確認しておかなければならない。

六七年秋の二回の羽田闘争にはじまる日本の安保階級闘争は、社・共既成指導部の主導する議会的・組合的示威闘争としてではなく一部の先進的行動部隊の直接実力闘争——街頭制圧・学園占拠等の直接実力闘争——が労働者学生大衆をまきこみ、それが大衆的実力闘争へと拡大波及するというかたちで発展してきた。

先進的行動部隊の実力街頭戦への「市民」や「群集」の参加と大衆的街頭制圧戦、地区占拠闘争へのそれの拡大、学園闘争における拠点占拠闘争の全学占拠バリケード戦への拡大、等々がそれであって、明らかにこれは、労働組合や学生自治会などの平時の階級組織の限界を超える直接反乱の闘争方式——先進的部分の部分反乱から出発してそれを行動自身によって全体に押しひろげるという直接反乱の闘争方式——であった。

そしてまさにこうした直接反乱の闘争方式こそが、それまでの議会主義的・組合主義的・市民主義的闘争の無力性をうきあがらせ、社・共既成指導部の日和見性と裂切り性とを大衆的にばくろし、六七年以来の日本階級闘争の全体をダイナミックに推進してきたのである。

全国の労働者学生諸君！

こうした点を確認するなら、一〇・二一以後はじまった敵権力の大弾圧攻勢が、このような直接反乱の闘争方式にたいするかれらの大先制攻撃であることは一目瞭然ではないか。

明らかにそれは、大衆的反乱闘争へと波及するまえに先進的反乱部隊を集中的に粉砕し、それによって一方では大衆的反乱闘争の芽を早期につみとるとともに、他方では同時にそれによってたちあがろうとしている後続の大衆部隊を恫喝することをねらったものだ。

そして安保階級闘争が現在つきあたっている壁は、観念左翼諸派の消極的防衛主義に支えられて、こうした敵権力の先制攻撃が一定の成果をおさめ、先進的行動部隊の先駆的反乱闘争によって大衆的反乱闘争を誘導しえなくなっていることにある。

しかもこうした壁は、観念左翼諸派による闘争のセクト的な私物化や、それの裏返しである消極的防衛主義や、自派組織のセクト的な防衛のための日和見主義の横行によって、闘争の内側からも拡大され、人為的に高められてきてもいるのだ。

では、こうした壁をうち破るためには、どうすればよいのか。

三、行動委員会の大衆的拡大へ

全国の労働者学生諸君！

その第一は、大衆的反乱闘争を先駆的に誘導する先進的行動部隊——行動委員会——を徹底的に拡大強化し、深く広く大衆のなかに根を下すことだ。

今日の日本階級闘争の特長の一つは、種々な規模の様々な色合いをもった無数の自発的な大衆行動団体が 簇生しつつ あることである。

われわれは、これらの大衆行動団体、活動家団体の目的的な創意性や自立的なダイナミズムをできるだけ尊重しながら、それらを共同的な大衆行動委員会——大衆行動委員会の共闘——に全力をあげて結合し、統合しなければならない。

そしてただちにはこうした大衆行動委員会共闘に組織できない諸団体にたいしては、われわれは、特定の闘争課題のための共同実行委員会の結成などの過度的方法を柔軟に運用しなければならない。

われわれは、『前衛』七号で明らかにしたように、大衆的反乱闘争の突破口をきりひらくこうした大衆行動委員会の建設を、職場、学園、地域における安保粉砕行動委員の結成、それらの安保粉砕共闘への結合、それを軸とする種々な大衆団体との共同実行委員会の結成、等々として実現するために全力を尽くすであろう。

日本階級闘争の現局面のいま一つの特徴は、これまで本格的な闘争にまだひきいれられたことのない新しい戦線で、大衆的反乱闘争の萌芽がはじまっているということだ。

その一つは明らかに高校生の学園闘争である。

若い高校生のエネルギーは巨大である。反乱闘争の突破口がどこかでつくりだされるなら、それはただちに全国に 波及 するであろう。

なぜなら、ここには大学よりもさらに極端な抑圧と疎外が集中されており、たんなる人権闘争、たんなる民主主義闘争でさえもひとたび大衆的に爆発すれば、全般的な学園反乱闘争へと急速に発展するほかはないからである。

最近の卒業式闘争の全国的流行と、それにたいする政府、支配階級の不安なまなざしとはこのことをなによりも明白にものがたっている。

いま一つは、中小企業未組織下層労働者の大衆的反乱闘争への胎動である。

日本の労働者階級の三分二を占めるこれらの未組織下層労働者の多くは、通常のブルジョア的権利さえもうばわれ、資本の二重、三重の収奪のもとにしんぎんしている。しかも日本資本主義の高度成長は、これらの未組織下層労働者の低賃金、長時間労働によって根底から支えられてきたのだ。

だから、ここには巨大な大衆反乱のエネルギー が秘めら れている。じっさい、一〇・二一新宿闘争や一・一八—一九神田カルチェラタン闘争において機動隊と果敢に闘った「群集」や「ヤジウマ」の一大供給源は、これら未組織下層労働者からなりたっていたのだ

われわれは、これら二つのまったく新しい戦線に全力をあげて反乱闘争のための大衆行動委員会を組織し、巨大の学生反乱と未組織下層労働者の大衆的反乱闘争をもって、基幹産業労働者を獲得し、かれらを社共既成指導部、組合官僚のくびきから解放しなければならない。

全国の労働者学生諸君！

だが、安保階級闘争の現在の壁をうちやぶるためには、こうした大衆的行動委員会、大衆行動組織の拡大だけでは不充分である。それは必要条件であっても充分条件ではない。

現在の困難は、戦闘的行動部隊の先駆的闘争だけによっては国家権力、機動隊の暴力の壁を破ることができず、またこの戦闘的行動部隊の断乎たる先駆的実力闘争なしには大衆的反乱闘争を誘導をしえないところにあるからである。

一〇・二一新宿占拠闘争で実証されたように、数万大衆の巨大な反乱闘争のまえには、ブルジョア国家権力も「法と秩序」の組織暴力も無力である。

だが、こうした反乱闘争に数万大衆を決起させるためには、戦闘的組織部隊の断乎たる実力闘争が必要なのであり、それによって国家権力・機動隊の壁をやぶってみせることが必要なのだ。

では、いかにしてそれは可能か

四、遊撃戦から大衆闘争へ

全国の労働者学生諸君！

それはこれまでの戦闘方法では不可能だ。これまでの戦闘方法は主として先進的な組織部隊の密集した突撃闘争によって機動隊の壁をやぶり、それによって大衆的反乱闘争を誘導するという点にあった。また、学園では、先駆的な拠点占拠闘争を断乎として貫徹しそれを全学占拠闘争へと押しひろめるという点にあった。

だが、最近の戦闘は、機動隊の装備、人員、結集力の増強のために、また占拠拠点へのかれらの早期の先制攻撃のために、こうした密集部隊の突撃闘争や固定的な拠点占拠闘争では、機動隊の壁を破ることがますます困難になりつつあることを教えている。

このことは、なにをものがたるか。

全国の労働者学生諸君！

それは、比較的小数部隊によって敵の弱点を集中的に攻撃する同時多面的な 奇襲戦、運動 戦、遊撃戦が、必要になったということだ。

ブルジョア国家権力の組織暴力は、傭兵組織に依存している。かれらの下級構成員、一般隊員、兵士は、賃銀を支払ってやとわれたりまたは徴募された労働者人民大衆自身だ。だから、ブルジョア国家権力の軍隊組織、警察組織は、一般隊員、兵士のあらゆる自発性を剥奪し、身分制的、閉鎖的、官僚制的な将校システムで、専政的にかれらを統制することをその根本的な組織原則としている。

だからこそ、かれらの組織暴力は、正規軍相互の戦闘や組織部隊だけの反乱闘争にたいしてはきわめて有効ではあるが、しかし、かれら部隊規模をはるかに上まわる巨大な大衆反乱や、小数部隊の迅速な遊撃戦にたいしては、手のほどこしようがないのだ。

いまやわれわれは、比較的小数部隊の迅速果敢な遊撃戦で敵の弱点を集中的に攻撃し、敵の組織暴力を分断し、かれらを無力化し、それの積み重ねによって、大衆的反乱闘争を誘導し組織する戦術を学ばなければならない。

しかも、じっさいには、こうした遊撃戦の一つの形態は、すでに自然発生的にいたるところではじまっているのだ。

その一つは、明らかに東大闘争だ。

一月一八—一九日の安田バリケードの破壊以来、東大を支配しているのは、機動隊の有事駐留体制であり、機動隊秩序だ。ここでは大衆反乱闘争へと発展の可能性のあるいっさいの拠点闘争は、すべて機動隊の早期的な先制攻撃によってつぶされている。ここから実力闘争は、必然的に、個々の教授の責任追及闘争や個々の授業粉砕闘争の反復へと移行し、それによってブルジョア学園秩序の回復を阻止し、闘争の断乎たる継続を宣言しているのである。現在の状況のもとでは、これが大衆的反乱闘争を準備する唯一の方法であることはまちがいない。そして明らかにこれは、遊撃戦の一種であり、また、遊撃戦を通じて大衆反乱闘争を準備する方法の一つなのだ。

遊撃戦のもう一つの例は、最近全国的に頻発している高校生の卒業式闘争に示されている。高校学園闘争は、学園ブルジョア秩序の強固性と大衆の意識状況からみて、また固定的な拠点占拠闘争は一般的には困難だからであり、敵の虚を衝く奇襲的な反乱闘争が、大衆反乱闘争への呼びかけの方法として、ここではなお有効だからである。

こうした遊撃戦は、一たび労働運動に眼を転ずるなら、じつは、日常茶飯事の現象なのである。ここでは職制権力と組合官僚権力——企業内ブルジョア秩序——が、労

勤労大衆のあらゆる反乱闘争に根をおろしているからだ。

労働運動では、拠点占拠闘争の大衆的占拠闘争への拡大という学園闘争にくりかえしみられる闘争方式は、一般にはただ、全般的な反乱闘争の直接の前段階としてのみ可能であろう。

ふりかえっていえば、学園闘争でそれがしばしば出現するのは、学園は資本の直接の搾取過程ではなく企業内の職制権力機構に匹敵する権力機構が存在しないからなのであり、その意味で学園は、ブルジョア秩序の弱い環だからであった。

五、遊撃戦と大衆闘争の結合へ

全国の労働者学生諸君！

遊撃戦の意義は、じつは、たんにこのように大衆的反乱闘争を準備するための過渡的手段として役立つという点にあるだけではない。

それはまた、大衆的反乱闘争と同時平行的に遂行し、それによって敵の攻撃を分散させ、無力化し、大衆反乱闘争の勝利を成功的に保証する手段としても用いることができる。

一〇・二一新宿占拠闘争の戦闘局面にたいし国家権力が騒乱罪発動を回避せざるをえなかったのは、根本的には、弾圧によってそれがより大規模な市街戦に発展することをおそれたためであるが、いまひとつには、対国会デモ、対防衛庁デモ闘争によって機動隊が分散させられていたことにもよるのである。

つまり、国会、防衛庁闘争は、新宿の大衆的占拠闘争にたいし、それを補足する遊撃戦として機能していたわけである。

そして国家権力の組織暴力のますます増強される今日の階級闘争の情況下では、こうした遊撃戦による大衆的反乱闘争の側面からの援助は、その重要性をますます増大しつつあるといわなければならない。

そしてまた、数百万の人口と複雑多岐な交通網の密集した現代日本の大都市では、平常の状態においてさえ都市機能はなかば麻痺しているのであって、機動隊、自衛隊の近代的機動力もみかけだおしのものにすぎず、むしろかえってこうした遊撃戦への弱点を増大させているのである。

それゆえ、遊撃戦が重要なのはたんに農民人口と農村地帯が圧倒的な後進国階級闘争のばあいだけでは決してない。

われわれは、いまや全力をあげて、遊撃戦、とくに都市を基盤とする遊撃戦に特有な戦闘方法と組織形態を探求しなければならない。

六、遊撃戦と現代革命

最後にわれわれは、革命闘争そのものにたいする遊撃戦の意義を確認しておかなければならない。

じつは、遊撃戦は、たんに日本の階級闘争の当面の壁をつきやぶるという観点からだけ必要になっているのではなく、現代革命そのものにかかわる根本問題だからである。

全国の労働者学生諸君！

遊撃戦が二〇世紀の現代革命にはじめて歴史的に登場したのは、一九〇五年の第一次ロシア革命におけるモスクワ蜂起においてであった。

レーニンはそれを総括してこういっている。

「モスクワがわれわれにあたえた第三の偉大な教訓は、戦術と陣形のための勢力の組織にかんするものである。軍事上の戦術は、軍事技術の水準にかかっている。——この真理をかんでふくめるようにマルクス主義者に説明してくれたのは、エンゲルスである。今日の軍事技術は、一九世紀中葉のそれではない。砲兵にむかって密集して対抗したり、ピストルでバリケードを守ったりするのは、ばかげたことであろう。そしてカウツキーが、モスクワ蜂起をへた今日ではエンゲルスの結論は再検討すべきときである、モスクワは新しいバリケード戦術を提起したと書いたのは、正しかった。この戦術とは、パルチザン戦争の戦術であった。この戦術の要求する組織は、機動的な、ごく小人数の小部隊である。すなわち、十人組、三人組、ときには二人組でさえある。今日、われわれのあいだでは五人組や三人組が話にのぼると、せせら笑う社会民主主義者に出あうこともめずらしくない。だが、このせせら笑いは、現代の軍事技術のもとでの市街戦から生れる戦術と組織のあたらしい問題に目をふさぐ、くだらない方法でしかない。諸君、モスクワ蜂起の物語を熟読玩味したまえ。そうすれば諸君は、「五人組」が「新らしいバリケード戦術」の問題とどんな結びつきをもっているかがおわかりになろう。

モスクワは、この戦術を提起したが、それを発展させ、多少とも広汎な、真に大衆的な規模で展開するところまではいかなかった。武装隊員の数は少なく、労働者大衆は大胆に攻撃せよというスローガンをあたえられず、またこのスローガンを遂行にうつしもしなかった。パルチザン隊の性格は、あまりにも一律で、その武器と闘争方法は不充分であり、大衆指導の能力はほとんど発達していなかった。われわれは、モスクワの経験からまなび、この経験を大衆のなかにひろめ、またこの経験をさらに発展させるよう大衆自身の創造力をよびおこしながら、以上の欠陥を埋めあわせなければならないし、また埋めあわせるであろう。そして十二月以後ほとんど絶え間なくロシアのいたるところで行なわれているあのパルチザン戦争と大衆的テロルは、蜂起のさいに正しい戦術を大衆におしえることを疑いもなく助けるであろう。社会民主党は、この大衆的テロルを承認し、それを自分の戦術にとりいれなければならない。ただそのさい、このテロルを組織化し、統制し、労働運動と全般的な革命闘争の利益と条件に従属させ、このパルチザン戦争の浮浪人的歪曲を容赦なく排除し、きりすてねばならぬことは、いうまでもない。パルチザン戦争のこのような浮浪人的歪曲は、モスクワ人達が蜂起のときに、またラトビア人たちが有名なラトビア共和国事件のときに、実にりっぱに、実に容赦なく始末をつけたのである」

このばあい、バリケード戦にかんするエンゲルスの結論としてレーニンが念頭においているのは、マルクスの『フランスにおける階級闘争』の一八九五年版にエンゲルスが書いた序文のことであって、ここでかれは、一八四八年革命以後の武器の改造と、街路の整理拡大は、四八年当時のような大衆的バリケード戦を不可能にしたと結論したのであった。

これにたいし、一九〇五年のロシア革命は、大衆的バリケード戦がパルチザン戦と結合されるならば、それが武装蜂起の新しい方法として役立ちうることを明らかにしたといえるのである。

そして、一九〇五年ロシア革命においてすでにそうであったとすれば、その後の武器と輸送組織の発達は、工場占拠ゼネスト、二重権力、武装蜂起という現代革命の基本路線にたいし、都市を中心とする遊撃戦、パルチザン戦の果す役割を、なおいっそう増大させているといわなければならない。

東大闘争の大弾圧に抗する

500万円のカンパを訴える!!

安保共闘救対部

千代田区飯田橋三—一—六飯田町ビル
振替東京三〇九七五番ＴＥＬ東京（二六四）八六六九

高校生諸君に訴える

安保粉砕共闘会議

一、高校生叛乱が開始された！

全国の高校生諸君！

いまや全国いたるところで、高校生叛乱ののろしがあがっている。

学校権力の不当処分や校外活動許可制に反対する校長室占拠、卒業式粉砕闘争等、叛乱は急速に全国化している。

こうした現時点の高校生叛乱の特徴は何か？

第一に、校長室占拠や卒業式粉砕闘争にみられるように、現在の学校秩序そのものにたいして疑問の目を向け、これを否定し、反逆する闘いに起ちあがっていることだ。

このことは当然のことながら、高校生の闘いが独自の闘争として始まったこと、学生運動の第二戦線や市民の一部として政治カンパニアに参加するにとどまらず、自らの解放を自らの闘いでかちとる闘争へと、第一歩をふみだしたということだ。これが第一の特徴だ。

第二に、今日の高校生叛乱の端緒的開始は、いうまでもなく、六七年の二つの羽田闘争から佐世保、王子、成田をへて六八年10・21新宿にいたる一連の基地闘争=地区占拠・街頭制圧闘争の高揚と、東大・日大を頂点としていまなお永続する学園占拠闘争の高揚から、直接の衝撃をうけていることだ。

高校生叛乱は、学生、青年労働者の基地闘争、学園占拠闘争と、本質的に連帯した闘いだ。

こうした高校生叛乱の特徴は、何に由来するか。それは第一に、高校生五〇〇万にたいする日本帝国主義の直接攻撃であり、第二に、いまや高校生攻 [illegible]

二、日常の高校生攻撃は激化する！

全国の高校生諸君！

資本と国家権力の高校生攻撃は、一方における国家主義イデオロギーの注入と、他方における高校の「労働力商品の大量かつ効率的生産機構」化を二本の柱として、激化している。

「期待される人間像」（一九六五年の中教審答申）から始まり、六七年の佐藤訪米後の「国を守る気概・愛国心」の注入、として急速に前面におしだされた「国防教育」「愛国心教育」の攻撃は、教科書や教師の国家統制をともないつつ、ますます激化している。戦後「民主教育」の中心にすえられた「民主・民主々義」がかげをひそめただけでなく、帝国主義戦争の美化、自衛隊の積極的肯定、神話の導入と天皇の権威の再強調、ストライキ罪悪論等の注入がおこなわれつつある。

他方、高校教育を労働力商品の効率的生産の場とする攻撃が、「多様化」の名のもとに首をだして進行している。中学を「職業適性」とし、高校教育を適性・能力・進路・職種に応じて「多様化」する（中教審、後期中等教育についての答申）とは、実は、生徒を「人的資源」の観点から中卒一 [illegible]

高校生は、資本の設定したこうしたふるい分け試験によって部分的専門的に能力を発達させること、そして他の生徒を連帯の対象としてではなく、追いおとす敵としてみることを強いられている。

そしてこうした非人間的高校教育とその下への生徒支配に疑問をいだき反逆する高校生にたいしては「高校生の政治活動の禁止」なる強権的学園支配をもって権力と資本はのぞんでいる。

こうしたナショナリズム教育と差別的労働力商品教育の攻撃は、五〇年代以降の反動的文教政策——敗戦のアメリカ占領軍によって日本のブルジョア支配階級におしつけられた教育民主化にたいする反動的まきかえし政策——の単純な延長ではない。

それは激化する世界危機と日本の戦後民主主義体制の動揺がブルジョア支配階級をして、国内労働者人民への政治的経済的攻撃の強化と官僚執行権力独裁への傾斜へとかりたてており、また、それにともなって日本のブルジョア支配階級の国民統合政策が議会主義的、経済的統合政策から国家主義的国権的統合政策へと移行しているからで [illegible]

攻撃にたいする唯一の反撃のとりでは高校生自らの闘いだ。

第二次大戦後、アメリカ占領軍は日本ブルジョワジーに教育の民主化をおしつけた。軍部と内務官僚の教育支配体制は解体され、公選制教育委員会と現場教師——教職員組合——の手に生徒と教育はゆだねられた。文部省は「助言者」の地位にあまんじた。ここでは教育労働者は——米占領政策の「非軍事化」から「反共基地化」への転換にともなって、政令二〇一号によりスト権をはく奪され、その闘争は体制内化されていたとはいえ——教育現場=生徒にたいする国家権力の攻撃にたいして防波堤の役割を果していた。

サンフランシスコ条約によって米帝権力が補佐的地位に退き、日本ブルジョワジーが自ら国家権力を掌握するや資本と国家権力による学園にたいする直接支配をめざす攻撃が開始された。教育委員会公選制の廃止と学校管理規則（一九五六年）、勤評（一九五八）の攻撃がそれだ。こうして学園秩序は教職員の手から文部省—任命制教委—校長—教頭、という系列、すなわち、国家権力とその末端機構である学園 [illegible]

つまり、戦後民主主義体制の動揺に直面した資本と国家権力は、教育の国家主義的帝国主義的改編攻撃へとかりたてられた。

だが同時に、権力の高校学園攻撃に対する高校生の抵抗と反逆の闘いが、学力テスト反対闘争（一九六一年）を突破口に始まった。

以上のことから次のことが確認できる。

第一に、五〇年代に教育現場=学園の直接支配体制をうちたてた国家権力は、いまや教育の国家主義的帝国主義的再編の攻撃を、かつてなくきびしく高校生の頭上にうちおろそうとしている。

第二に戦後まがりなりにも学園秩序を擁護し、民主教育の担い手となった教職員は、国家権力の一貫した攻撃の前につぎつぎに敗北をかさね、不本意ながらにせよ、国家権力の高校生攻撃と生徒支配の道具となっている。

したがって、第三に、いまや資本と国家権力の高校生攻撃にたいする反撃のとりでは、高校生自らの抵抗と反逆の闘争以外にない。

四、全国高校生叛乱へ！

[illegible]

労働力商品の素材としか、モノとしてしか高校生を扱わぬ高校教育を拒否せよ！

ブルジョア学園秩序は、闘う高校生自らの手による秩序——高校生の自己秩序=自己権力——でおきかえられねばならない。

学園自己権力をめざす高校生の叛乱闘争は、同じくブルジョア学園秩序の解体と学生自己権力（学生ソビエト）の形成をめざす大学生の闘争や、地区占拠・街頭制圧の闘争、工場・職場でプロレタリア自己秩序の形成をめざす職場・工場の叛乱闘争と固く連帯し、安保ゼネストの一翼を構成するだろう。

とくにこの四～六月における高校生叛乱の任務は重要だ。

10・21騒乱罪とうかつでもって街頭闘争への徹底したとうかつ攻撃にでた権力は、一月東大安田バリケード解体を突破口に、学園においても徹底したとうかつ攻撃にでている。

こうした権力のとうかつ攻撃を前にして、六月安保粉砕闘争、今秋佐藤訪米阻止の闘いを、巨万の労働者学生人民大衆による街頭制圧闘争として闘いぬき、安保ゼネストへの展望をきりひらくためには、未動員大学の学園占拠闘争への突入とともに、五〇〇万高校生の叛乱闘争へのけっ起が決定的に重要だ。

全国高校学園叛乱で、学園占拠闘争の貫徹、工場占拠闘争の展望をきりひらけ！

そのために、すべての高校に、卒業式粉砕、入学式粉砕、反動的学校規則撤廃、等々の闘争のための行動委員会をつくろう。行動委員会の先進的な闘 [illegible]

全国学園闘争の現局面

学園反乱を学生反乱へ

一、学園闘争の現局面

二月中旬――権力が日大バリケード破壊の余勢をかって一気に中大バリケードをも圧殺した二月中旬――以降から三月上旬にいたる全国学園闘争の現段階の特徴は何か。

それは、第一に学園反乱の全国化のより一層の拡大――入試粉砕を軸とする関西学園闘争の爆発、北海道を含む学園反乱の全国的波及、全共闘組織の全国的確立――であり、

第二に、こうした学園反乱の爆発とその全国化によって誘導された、全国至るところにおける高校生直接行動の開始

第三に、首都学園戦線の主軸―東大、日大―における授業に対する集中的、ゲリラ的攻撃――遊撃戦――による大衆結集力の維持である。

だが、第四に、こうした現状に対し、国家権力の対応もまたその先制攻撃を全般的特徴とするに至った。入試の前々日、三月一日の京大への奇襲、三月四日の東大駒場の教授会一七〇名の缶詰め団交に対する電撃的介入等。そして、こうした権力の全力を挙げた恫喝攻撃により、首都学園戦線は学園反乱の全国化、地方における高揚そして高校生反乱の序奏の津波の如き波及にも拘らず、明らかに防衛に立たされている。

従って第五に、この現状を打開するためには、現に展開されている遊撃戦の意義を明らかにし、遊撃戦と大衆闘争との結合を目的意識的に戦術設定すること、それが四月闘争へ向けての我々の任務である。

一月二一日〜二三日の「狂気の三日間」における日共民青―大学当局との京大、立命全共闘の死闘それを出発点とした京大、立命大内部におけるストライキ闘争の拡大と全関西闘争への拡大を、東大から始まった「全国化」の第一段階とするならば、二月中旬以降の全関西中国学園闘争の入試粉砕闘争への集約過程と、学園占拠闘争の地方における全般的エスカレートとの結合は、全国化の第二段階を形成した。

東大闘争の直接の余波―増寮反対―を以て闘争に入った帯広畜産大、広島大、鳥取大の中で、帯畜大は、ついに二月二六日、全共闘を結成して学館占拠に突入、北海道における学園反乱の公然たる突破口をつくりだした。

大学移転反対を契機にストライキ闘争に突入した新潟大、群馬大は、この二月中旬、あいついで学内占拠闘争に転化し、さらに一月以来官憲立入り問題でストライキに入った岡山大学も、学長の居直りに対する追及をバネに全共闘による占拠ストライキへと移行した。

日共民青の西の拠点、山口大においても、学長と警察権力の結託に対する学生反乱は、日共民青のヘゲモニーを烈しくゆさぶり、全闘連を軸とする全共闘結成へと発展しつつある。

さらに弘前大をはじめとして、全共闘結成の準備をはじめている大学がこれに続いている。

こうして全国津々浦々に波及した学園反乱は第一に学生自治会執行部の掌握によって惰眠をムサボってきた日共民青の学生運動支配に根底からの打撃を与え、第二に学生自治会にかわる反乱の組織=全共闘組織を、全国に形成・確立させている。

このようにして、二月中旬以降の全国各地の学園闘争が、ストライキ闘争から、占拠闘争=反乱闘争に転化したことが際立った特徴であるのに対し、この間の全関西闘争は、学園をめぐる改良派との武装闘争から入試をめぐる対権力闘争へと移行した。

ところで入試については、学園秩序の基礎の一環であり、しかもそれは、大学秩序と高校秩序との接点をなしている。

では、入試粉砕の課題をはじめて全国的規模で設定するにいたった全関西闘争は、いかなる問題点を提出しているか。

二、京大入試闘争の教訓

京大闘争の展開

一月十六日、東大バリケードをめぐる全国的攻防戦の真ただ中において、自己自身の闘争を以て東大、日大闘争との連帯を志した京大教養学部闘争委員会と寮闘争委員会は、「無条件増寮、二〇年計画白紙撤回、経理全面公開」の三項目要求を掲げて、学生部占拠に突入した。

そして、一月二一日、全関西集会を本部時計台前にて遂行しようとする左派大衆に対して、安田バリケードをめぐる攻防戦に恐怖し京大学園秩序の維持に気の狂った奥田大学当局・日共民青・秩序派学生大衆は、本部周辺に逆バリケードをはりめぐらし、左派大衆をロックアウトするとともに、バリケード内部に「京大ナショナリズム」の「狂気の三日間」を演出した。

だがこの狂気の荒れ狂う本部構内において学生部占拠を身をていして貫徹せんとする六〇名の学友に連帯して数百名の大衆が学生部前のすわり込みに参加、これに対し、日共民青一〇〇〇名が、リンチ、ゴボウぬきをもって攻撃を開始し、さらに学生部バリケードに対するホース四本を先頭とする物量攻撃によって、二三日午前十一時に学生部バリケードを破壊した。

こうして、奥田―日共の「自主防衛路線」が勝利したかにみえたとき、まさに「一体何のためのだれのための自主防衛なのか」という根本問題が出現した。民青主催の「暴力学生弾がい集会」は、しかし「自己批判」のために連れ出された六〇名の学生部占拠部隊を軸とする集会に一転し、ついにそこから民青は逃亡、集会は寮闘争委による対学生部長団交へと革命的発展をとげ、さらに奥田学長をひきずり出すことによって、京大闘争は巨大な展開をとげたのである。

こうして京大闘争は、従来の三項目要求に加えて奥田大学当局の責任追及を軸とする八項目要求へと発展し、二五―二六―二七と連続する対総長団交から、一月三〇日の教養代議員大会におけるストライキ決定を突破口として二月三日文学部自治委員会のストライキ決定、四日医学部学生大会におけるストライキへと全学ストライキへの波及・発展の可能性を示した。また二月七日、日共民青の教養代議員大会開催によるバリケード撤去策動は、教養闘争委四〇〇名の実力の前に粉砕され、日共民青の強力な秩序を誇る京大において、彼等のヘゲモニーにさらに強烈なクサビが打ち込まれた。

こうした京大左派=全共闘の攻勢に対し、「秩序内闘争・入試実現」を旗印しとして必死の巻き返しに出た日共民青は、二月十四日一〇〇〇名の部隊の下に再度の教養代議員大会を強行し、それに対して、全共闘は一〇〇〇名の行動隊を以て対抗し、京大における内部階級闘争は、一月九日の東大における教育学部解放闘争、十日―十一日の駒場民青代議員大会粉砕闘争に匹敵する最高局面を切り開くのである。

入試闘争の経過

この十四日の内部闘争を境として、二一日京大時計台前集会の全関西労学総決起集会（七〇〇）、二三日の同志社における全京都労学市民連帯集会（三〇〇〇）を通して、京大を中軸とする全関西の入試粉砕闘争へと集約されるのである。だが、他方においては、一月下旬から二月上旬にかけて、教養バリケード占拠を突破口として文・医両学部のストライキへと波及を始めた全学ストライキへの攻勢が、この中旬以降停滞し、本部のバリケード占拠への展望も停滞したことを知っておかねばならない。

では、こうして始まった京大入試阻止闘争は、いかなる経過をとったのか。

二六日夜の京大全共闘四〇〇による本部時計台の電撃的占拠、翌二七日の対民青との死闘によって京大当局の学内入試の展望は完全に粉砕され、文部省及び京大を中心とする全関西の諸大学当局は、学外入試の遂行、それの機動隊派けんによる強行的秩序維持の路線を設定し、そのために三月一日、国家権力は先制攻撃に出た。

この日、京大闘争勝利労学決起集会のために本部時計台前に集結していた矢先に、機動隊二千三〇〇は、突如教養部に侵入、そこで武器と思われるあらゆるものを押収しだした。

だが、この突然の権力の急襲を聞くや、京大の学友は続々と本部時計台広場に集まり、七時には、二〇〇〇名をこす学友によって狭いキャンパスは埋めつくされた。官憲は、この中に押しいり、時計台を強行捜索しようとしたのだ。指揮官車を先頭に正門から押し入ろうとする機動隊に対して、まず烈しく抵抗したのは三〇〇〇名をこす京大学生大衆であり、この大衆的抗戦をバックとして実力武装隊の抗戦が登場したのである。機動隊は時計台に侵入したものの、しかしキャンパス内では数千名の京大大衆と機動隊との野戦が続き午後十時、機動隊が構内撤去したのちも、一般群衆も含めての東大路通りにおけるカルケェラタン闘争が続いたのである。

だが、こうした三月一日の京大構内を中心とする大衆的反権力闘争は、しかし翌三月二日から三日にかけての入試粉砕闘争へとは転化されることなく、分散・放置された。その結果、三月二日の集会への京大大衆の結集は激減し、三月三日の入試当日は、全関西の左翼セクトの部隊を中心とする二〇〇名の闘争になった。

二〇〇名の武装デモは、京大入試の強行に全焦点を設定し、機動隊秩序を布く権力に対して、投石を以て入試粉砕の意志を表明したが、三〇分前後の中に制圧され、ついに機動隊秩序は、東京から関西へと波及することを以って、京大を焦点とする全関西の入試粉砕闘争は終ったのである。

入試闘争の教訓

では、こうした入試粉砕闘争にいたるこの間の京大、関西学園闘争の問題点とその教訓は何であったか。

それは第一に、三・一の権力介入に対する大衆抗戦を、三・二、三の入試阻止闘争へとひきつぐ方針追求に全力が傾注されるのではなく、入試粉砕闘争の主体はセクト活動家であるとだけ観念されてその大衆的規模のエネルギーは、一日だけのものとして放置されたことだ。

第二に、より基本的問題としては、二月中旬以降に示された全学ストライキへの展開力の停滞に鋭く露呈された問題、すなわち入試粉砕に焦点をおく全共闘指導部と大衆とのギャップである。このことは、闘争の内部側面からいえば二・一四の教養代議員大会をめぐる対民青闘争の手詰まり、二・二六―二七の時計台占拠をめぐる対民青闘争への大衆結集力の減少に示される問題であり、一言にしていえば民青に対する政治的対決の詰めの甘さである。

第三には、以上の背景には、全共闘指導部 セクトの「大学解体論」を生のままで大衆にぶつける最大限綱領主義的偏向があった、といわねばならない。三項目要求後の八項目要求こそが、大学当局および日共民青に対する政治的対決の軸であり、従って同時に大衆結集の軸であって、大学解体論の最大限綱領主義的持ち込みがそれらの点をぼやかし、その結果として、三項目―八項目要求との結

三、遊撃 衆闘争

二月十八日、日大バリケードの最後の拠点=文理学部バリケードを国家権力は破壊し、続く十九日神田・お茶の水解放区の拠点=中大バリケードにも一気に襲いかかってこれを破壊した。こうして東大における機動隊の有事出動体制日大における右翼の直接支配とロックアウト体制の分業秩序、中大におけるロックアウト体制という形で、権力は首都学園戦線に対する直接の恫喝体制を布き、さらにこれらを背景として、二月二六日の電通大バリケードの破壊とさらに教育大バリケードの破壊とをあいついで強行した。

だが、このことは決して、学園における秩序の復活と全共闘組織の解体状況をいみしてはいない。

首都学園戦線は、機動隊の有事出動体制とロックアウト攻撃の中において、ゲリラ闘争=遊撃戦によって秩序の復活をじゅうりんし、また遊撃戦による実力突破によって全共闘組織への大衆結集力を維持し、日共民青の体制内改良運動に打撃を与えているのだ。

すなわち、二月上旬の田村（教養学部長）、大内代行代理の人民裁判以降、大学首脳陣の学園からの逃亡によって手詰まりにおちいった責任者追及闘争は、各学部段階におけるゲリラ的な教授つるしあげ闘争、それによる授業秩序の復活粉砕闘争へと転化したのであり、まさにこうした広範なパルチザン的戦闘を背景として、三月三日の駒場、本郷における大衆的実力闘争が爆発したのである。

この日午後、全共闘五〇〇は、法学部研究室をバリケード封鎖、さらに駒場共闘は教授室に突入、教授一七〇名を徹底的に追及するとともに、そのかんづめに入ったのである。

山自労弾圧粉砕支援共闘への結集を訴える

山自労弾圧粉砕支援共闘会議

全都全国の労働者学生諸君

山谷労働者の解放をめざす山谷自立合同労組の鈴木、船本、石田の三名の指導的同志が二月十七、十八の両日、梶大助一派の告発にもとづいて検挙された。

かれらは、山谷解放闘争のウラ切り者、梶一派の追放に立ち上った。まさにそのときに、口先では「暴動」を叫んでいた梶一派によって、白昼公然と警察の手に売りわたされたのだ。

全都全国の労働者学生諸君

だがこの弾圧は山谷自立合同労組への特殊な弾圧にとどまるものではない。

これらは、同じく二月十八日、六ヶ月の職場占拠闘争を闘いぬいてきた東京書院、新興出版の闘う労働者に加えられた十二名の検挙と、本質的に同じものである。

これはまた、一月十八、十九日全国学園占拠闘争への総攻撃の突破口として加えられた東大安田講堂への一大弾圧と、本質的に同じ攻撃である。

この弾圧こそは、一昨年の二回の羽田闘争をきっかけとして始まった基地包囲、街頭制圧、学園占拠、職場占拠等による大衆叛乱闘争への国家権力の総攻撃の一環であり、まさにそのようなものとして、発展してきた安保階級闘争への敵権力の 先制攻撃の 一環である。

全都全国の労働者学生諸君

山谷は下層プロレタリアートの一大居住地だ。

社外工、臨時工、下請の中小零細企業労働者と同様、かれらは、港湾、道路、造船等の、日本資本主義の基幹部門に働く労働者でありながら、二重三重の収奪にさらされ、あまつさえ、その居住地においても、今日まで、いっさいの人間的諸権利をうばわれてきた。

この山谷で、いくたびかの自然発生的暴動の教訓をとおして、昨年夏山谷自立労組が結成された。

ところが 梶一派は、口先では「血を流せ」と扇動しつつ、いったん闘争ののろしがあがるやその消防ポンプのようにふるまう裏切り行為に狂奔したのだ。

十一月〜十二月の美濃部都政にたいする福祉対策要求闘争は大きな盛上りをみせ、ついに都庁集団抗議闘争をかちとり、まさに地代実力闘争へと発展しようとしたその矢先に、梶は、山自労書記局を分断し、闘争の発展を内部から破壊した。

山谷 ではこれまで 社共の「運動」がなかったわけではない。だが山谷のように二重三重の収奪にさらされいっさいの人間的諸権利をうばわれている地域では、改良主義運動は成長しなかったのである。全ての闘いは、暴動の形態をとらざるをえない。

だからこそ山谷の内部の敵は、口先では暴動を煽動する。だが一度暴動がはじまると、それを内部から破壊し、警察権力にうりわたす。そうするとき、かれらの裏切りはもっとも効果的になるからだ。

梶大助こそ、警察権力と結託したこのような裏切り者の頭目であった。

全都全国の労働者学生諸君！

山谷の真に闘う労働者は、内部の敵=梶一派の追放なしには前進しえない。

ちょうど東大をはじめとする全国学園占拠闘争の勝利が日共民青=第二機動隊の粉砕なしにありえないように、山谷でも、内部階級闘争の結着がとわれている。

すべての闘う労働者学生は、いまこそ山谷自立労組支援と梶一派の追放のためにたち上ろうではないか。

全都全国の労働者学生諸君！

安保階級闘争は昨年の10・21新宿街頭制圧闘争以降の国家権力の激しい先制攻撃の中で危機にたっている。

街頭制圧闘争の後退と学園占拠闘争の後退という否定しえぬ現実の中で、山谷等下層プロレタリアート居住地区は反乱闘争の新たな突破口たりうる ブルジョワ秩序の「弱い環」であろう。そしてまた、山谷プロレタリアートのおかれた根底的抑圧状態によって、かれらの反乱闘争こそは、日本帝国主義にたいする根底的な反乱闘争へののろしを意味するであろう。

全都全国の労働者学生諸君

闘う山自労の防衛と前進のためにいまこそすべての労働者学生は結集しよう ではないか。勝利のための共闘会議を結成し、いっさいの差別や搾取の撤廃のために闘おうではないか。

人間解放のための、プロレタリアの団結をうちかためるための闘いに総結集しようではないか。

このようにしてこそ、低賃金と合理化と財政攻撃に加えて、あらゆる強権的抑圧をもってする支配階級の官僚執行権力独裁を打ち破る、すべての労働者学生の全国的闘争組織建設の支柱はうちたてられるであろう。

弾圧をはねかえし、梶一派を追放する闘いに連帯するすべての労働者学生および大衆諸組織の熱烈な連帯をここに訴える。

（一九六九年二月）

（支援共闘事務局の連絡先は前衛社）

問は何であっ
二の権力介
、三・二、
ひきつぐ方
されるのでは
全体はセク
観念されて
ルギーは、
放置された
問題として
かされた全学
の停滞に鋭
なわち入試
闘指導部と
ある。このこ
点からいえば
大会をめぐ
り、二・二
題をめぐる
権力の減少
、一言にし
政治的対決
景には、全
「大学解体
にぶつける
があった、
三項目要求
が、大学当局
る政治的対
同時に大衆
大学解体論の
込みがそれ
その結果とし
要求との結
バリケードの
部バリケード
、続く十九日
区の拠点＝中
気に襲いかか
。こうして東
有事出動体制
直接支配とロ
業秩序、中大
ト体制という
園戦線に対す
付き、さらに
、二月二六日
の破壊とさら
の破壊とをあ
決して、学園
と全共闘組織
てはいない。
機動隊の有事
ウト攻撃の中
争＝遊撃戦に
じゅうりんし
力突破によっ
衆結集力を維
制内改良運動
のだ。
有の田村（教
行代理の人民
陣の学園から
まりにおちい
は、各学部段
る授業秩序の
な教授つるし
化したのであ
広範なパルチ
して、三月三
ける大衆的実
である。
闘五〇〇は、
ケード封鎖、
授室に突入、
的に追及する
づめに入った

合をふまえた入試粉砕スローガンとして設定されず、入試粉砕の課題が京大闘争への外的持ち込みの域を出られなかったことである。

だが、第四に、われわれが京大入試粉砕闘争における戦術的教訓として明確にさせなければならないのは、三月三日当日の教訓である。この日の二〇〇名内外の武装デモは、カンパニア的示威闘争でも精鋭による入試会場に対するパルチザン的遊撃戦でもなく、両者の中間的な行動であり、従って京都一帯に戒厳体制をおいている機動隊秩序の配置を前提とすればそれはいちじるしく中途半端な戦術であった。

三月一日の大衆的反権力闘争を分散させた中においては、しかも権力の戒厳秩序の中においては、むしろ三月三日に要求されていたのは、少数精鋭部隊の組織による入試会場へのパルチザン的戦闘行動＝遊撃戦方式による直接行動、それによる入試秩序への直接的打撃であったろう。

そしてまたこうしたパルチザン戦、遊撃戦の問題は、たんに京大入試をめぐる特殊な戦術問題なのでは決してない。それは、まさに機動隊秩序に対して、二月以来、首都の学園戦線が対抗し続けているその主要な積極的戦術なのであり、またそれも大衆闘争との結合こそが、機動隊秩序を打破していく上での現時点の特殊に重要な環をなしているのだ。

遊撃戦と大闘争の結合

この闘争は、いずれもより広範な大衆闘争に転化しようとする矢先に、権力（機動隊）の先制的介入の前にその発展を阻止されたとはいえ、まさにこうしたパルチザン的戦闘行動こそが、東大における秩序の復活を阻止し、加藤にその展望を見失わせ、さらに日共民青の解体状況を促進しているのだ。

それだけではない。日大においても、理工学部を中心とする執ような授業再開に対するパルチザン闘争、三月八日の文理学部におけるバリケード再構築闘争というかたちで、学部闘争委員会の大衆結集力の維持と拡大が展開されているのだ。

こうした点を総括するとき、われわれは、現在のパルチザン的戦闘行動を、権力の恫喝体制下におけるたんに消極的行動として位置づける視点から決別しなければならない。逆にそれこそが、権力の恫喝体制下にありながら、敵に打撃を与え、大衆を結集し、戦闘部隊を訓練し、それらによって敵の弾圧体制の打破に向けて前進していく積極的戦術を果しているのだ。

遊撃戦と大衆闘争の結合――これこそが、首都学園戦線に問われている現段階の基本戦術である。それこそが、敵権力の全力を集中した恫喝体制の打破に向けて、4・28闘争を焦点とする三―四月闘争を組織していく基本戦術でありまたこの基本戦術の一環として、三・一四の東大、日大等首都十四大学における一斉奪還行動、三・二三の同じく一斉行動がまさに全都遊撃戦としての徹底的積極性を与えられ、その実現のために全力が投入されなければならない。

四、学園闘争の展望

高校生叛乱の端緒的開始

パルチザン的戦闘行動による首都学園戦線の堅持・学園反乱の全国化と対応して、いまや新しく高校生の直接行動が全国いたる所において勃発をはじめた。それは現存高校秩序の総括的集約点＝卒業式秩序に対する反逆である。答辞・送辞の自主作成、官製の答辞、送辞のスリカエ、卒業証書の破棄卒業式からの退場、式場へのたれまく、そしてヘルメットと武装による卒業式そのものの粉砕闘争と多様な闘争形態をもって、高校生直接行動は一挙に噴出を開始した。しかもそれは、まさに全国各地、いたるところにおいて一斉に始まったのである。

これは、まぎれもなく学園反乱の高校生反乱への波及の開始であり、高校生五〇〇万の反乱闘争の端緒的開始以外の何物でもない。

今日の学園闘争の本質が、まさにブルジョア学園秩序への挑戦―ブルジョア学園秩序の否定とそれに対する学生自己秩序の対置―であり、ブルジョア学園秩序からの解放であるのと全く同じように開始された高校生直接行動は、高校教育の資本への従属とそれを許容しむしろ加担している教師秩序への反逆であり、そうした高校秩序の否定とそこからの解放をその本質としているのである。

したがっていまや、全国一斉に開始された高校生直接行動を、高校生反乱―五〇〇万高校生の反乱闘争―に組織することは、今日の日本階級闘争の重要な任務であり、またそれによってはじめて、真の意味で「学園反乱の全国化」が実現するのだ。

現時点での配置

六七年の二度の羽田闘争と六八年一月の佐世保闘争は、日本階級闘争に巨大な転換を画した。ここにおいて従来の街頭闘争は街頭制圧闘争へと、すなわち「占拠」を本質性とする闘争へと発展し、それにともなってはじめて大衆武装の萌芽が登場した。そして、六八年三月の中大学費値上反対闘争へと波及し、こうして、街頭占拠と学園占拠、職場闘争の相互促進的発展関係による安保階級闘争の巨大な高揚がはじまった。五月の日大、六月の東大をもってさらに始まった全国学園闘争は、九月の日大における万余の大衆的実力闘争――三崎町制圧闘争――による権力のバリケード破壊攻撃の粉砕・古田人民裁判、そして東大における全学ストライキへの突入を両軸として全国的爆発をとげた。そしてこれらを背景として、10・8―10・21の新宿地区占拠闘争が爆発したのである。

だが、こうして羽田以降の日本階級闘争の全集約点、全頂点として達成された10・21闘争は、しかしその連続貫徹を実現しえぬことによって、権力に騒乱罪発動の恫喝攻撃を許し、逆に10・21を境に権力の恫喝攻撃が全面化したのであった。

こうして、十一月以降の学園闘争には、恫喝攻撃を巻き返す全体的任務が課せられたにもかかわらず、11・22、1・9、1・15、という学園闘争の決定的局面における左翼セクト諸派の日和見主義と消極的防衛主義とによって、権力の恫喝体制は、学園内部に直接波及してきたのである。

したがって、学園闘争をその一環とする日本階級闘争には、こうした「法と秩序の維持」――安保体制の堅持――をその旗印しとして七〇年闘争に向けこの先制攻撃に全力を投入している権力の恫喝体制を打破すること、それによって、数万大衆の地区占拠の連続貫徹とさらには工場占拠ゼネストへの波及が、その根本から問われているのだ。それこそが、六九年闘争の任務である。

そしてこのことは、

一、首都学園戦線における遊撃戦による機動隊秩序・大学権力との対決とそれへの大衆結集
二、学園反乱の全国化
三、五〇〇万高校生の反乱闘争の全国的開始
四、新興出版・東京醫院闘争をもって始まった二〇〇〇万の中小零細プロレタリアートのゲリラ的反乱闘争の開始および生産点と密着した下層プロレタリア居住地″山谷″における反乱闘争への新たな主体的胎動
五、基幹公労協プロレタリアートが、社民・組合官僚の裏切りと統制のもとに、不満をもちつつも立ち止まっている

という日本におけるプロレタリア階級内部の基本的配置を踏まえるならば「工場占拠・学園占拠・地区占拠の安保粉砕ゼネスト」を追求するという任務は、未動員大私学のバリケード・学園反乱の全国化・高校生反乱の動員と、中小零細プロレタリアートの反乱闘争の公然化と拡大という両翼から基幹プロレタリアートの流動を促進し、大衆闘争への決起を追求するということだ。

現時点での任務

全都全国の学生労働者諸君！

三―四月の学生闘争を、まさにこうした六九年闘争の基本任務の一環として闘かいぬこうではないか。

☆遊撃戦と大衆闘争の結合で四月闘争の爆発へ！

☆三・一四、三・二三の全都一斉奪還行動を、全都遊撃戦として貫徹せよ！

☆早大、法大、明大のバリケード占拠闘争を直ちに準備し実現せよ！

☆全国各地に全共闘を組織し、学園反乱の全国化を促進せよ！

☆安保粉砕行動委員会を、学園高校に全力を挙げて組織し、確立せよ！

☆行動委員会を中核として、大衆闘争委員会を強化し、行動委員会をもって大衆闘争を新たに開始せよ！

☆安保共闘を、行動委員会の全都全国共闘とせよ！

☆安保共闘をもって、工場占拠学園占拠、街頭制圧の安保粉砕ゼネストを切り開け！

国鉄労働者の課題は何か

3.18ストを

職場大衆叛乱闘争の突破口とせよ

（一）六九年二月闘争の経過

二月六日〜十日、さらに二六日〜二八日にかけて展開された東鉄三分割反対の闘いは、この新体制の実施期日三月一日になだれこむことで、事実上期限切れの終止符をうった。国労はこの三分割案を一九七〇年をむかえての国労分断化攻撃であり、合理的管理体制確立のためとは名ばかりで、管理重複を伴う不合理体制でしかないと反対し、強力な順法闘争をくみ、これに勤労が同調した。しかも国労はこの闘いに事実上一九六七年四月にはじまった五万人合理化計画への闘いの一環としてとりくみ二月二六日、三月一日に強力なストライキを計画し、とくに三・一ストは勤労とともに三五〇万人の足をうばうものとして設定したのである。

この三・一スト回避、東鉄三分割実施は、

①分割後の必要人員確保
②準備のできたところから実施
③現業（電車・保線区）は七月一日より実施、これにむけて労使協議を行う
④国労東京地本組織は三分割しない

を妥協内容とするものであった。この攻撃が一九六五年よりの第三次合理化計画の一環であることをみれば、国鉄労働者の強力な闘いにも拘らず、またしても当局の攻撃は一つの拠点をつくったわけである。

一九六七年末の闘い以降の国鉄労働者の闘いには目をみはるものがある。同年四月一日に発表された「二年間で五万人の合理化」案を契機に、国鉄労働者はこの攻撃にたいする闘いの意識を急速につよめ、ストライキ闘争に結集した。また同年八月八日の米軍ジェット燃料タンク車の新宿駅構内炎上以降の米タンにたいする闘い、とくに学生、青年労働者の闘いは国鉄労働者に大きな衝撃を与えるともに、国労の反対闘争に新たな方向を示唆するものであった。

六七年年末闘争、六八年春闘、そして十月一日ダイヤ大改正攻撃の九月闘争、さらに十二月三波の闘いの中に、こうした影響ははっきりとあらわれた。大衆の列車運休、遅延による政府、資本への打撃が追求された。この結果当局の二カ年間五万人合理化攻撃は列車保新設、電気機関車（EL）ジーゼル機関車（DL）一人乗務、電修所廃止等の先送り、あるいは第三委員会委託等、その予定をくるわされている。

だがこうした果敢な闘いにもかかわらず十月ダイヤ大改正、あるいはたとえ引きのばしの形式をとったにしてもEL、DL一人乗務の第三機関委託、そして東鉄三分割の容認等、基本的には当局の攻撃を許してきている事実は否定できない。

（二）国鉄合理化攻撃の本質

六七年四月以降かけられてきた合理化攻撃は、直接的には一九六五年以降の国鉄第三次合理化（三兆一八二〇億円）の突破口として設定された。これは直接的な首切りは伴わないものの、大規模な投資に伴う新規雇用の抑制を内容とした能率向上策であり、また配転等による高年令者の首切り促進策である。その規模は一二万七〇〇〇人の要員削減であり、五万人合理化はその第二次（二カ年）計画である。

しかも国鉄当局は、この五万人合理化につぎ現在の四七万人の人員を十年間で四〇万人にするという七万八千人にのぼる直接首切り攻撃を発表した。これは財政補助を断つこと、ローカル線七〇〇〇キロの廃止、駅の統廃合、さらに同期間に三回の国鉄運賃値上げを行い、その第一回として今年四月一日より平均十%の運賃値上げを行うという極めて集中的、かつ非妥協的攻撃である。

もとよりこうした国鉄の合理化は、一九四九年の首切り・独立採算制導入以降、一九五七〜六〇年の動力源切りかえを内容とする第一次合理化、一九六一〜六四年の高度成長に照応する幹線輸送力増強のための第二次合理化の継承としての歴史的性格をもっている。だがとくに現段階の特徴は、これが一九六〇年以降の民間重工業設備投資を軸とした高度成長にこたえるため巨額の借入金に依拠した国鉄投資がもたらした財政構造に起因している。すなわち一面では巨額の借入金や運賃値上げによる財政収奪に依拠し社会資本投資を強行しながら、他面これがもたらす矛盾を全面的に国鉄労働者に転嫁しようとするものである。

これはあきらかに一九六四年以降、国際通貨体制の動揺の下で国際競争が激化するのに応じて、全面的に展開されはじめた重工業合理化政策にひきつづくものでありまた現在の資本攻勢の焦点となっている。

またそれゆえにこうした攻撃は名高い、国鉄の高年令労働者を中心とした低賃金を固定化し、労務管理を飛躍的につよめ、職制の職場支配強化により職場の労働運動の圧殺をはかるものとなっている。このため労働者の生活は一層耐えがたいものとなり、労働災害も相次ぐ国鉄事故としてあらわれている。

五万人合理化実現のための、電修所廃止、EL、DLの一人乗務、列車掛制度の新設、客貨車の回帰キロ延長、資材センターの設置、保線区の統合廃止等とはすべて直接的な労働強化、配転につづく首切りにつながるものである。昨年十月一日のダイヤ大改正は、第三次合理化の中間総括として約六%の能率向上をねらったものであった。

（三）指導部の日和見主義

二八万人を組織する国鉄労働組合（神戸世志夫委員長）、六万三千人を擁する国鉄動力車組合（兼高隆委員長）は、共にこうした攻撃にたいする闘いを宣言し、そして六七年以降の闘いを組織してきた。

にもかかわらず、この基本的攻撃にたいし一定の抵抗を展開しながらも、これを〝条件闘争〟として次々と当局の計画をうけ入れてきている。昨年十一月の第三六回国労本部東京地方委員会は、方針においてこれを「基本要求先行解決方式」―基本要求を先行解決しないかぎり、合理化問題の交渉に応じられないーを基本方針とするものと断じ、これに批判を集中している。そして反合闘争を「合理化そのものを粉砕すべき」であるにもかかわらず「時短・職場団交権、人事協約等である程度前進したことをもってEL・DL助士廃止、電修所廃止を除く他の合理化事業を全てまとめてきている」と鋭くその本質をあばいている。

そしてまた少なからぬ労力を国鉄部門にきづいてきた日共は、露骨にこの国労本部の方針を支持し自ら独自の批判的部隊として登場する途をとざし、ただ一点、国労の社会党支持を攻撃し、社共統一戦線こそ勝利の道と、臆面もなく三池闘争時の方針をくりかえしている。そしてこの社共統一戦線こそそのきりふだである。

こうした主流にたいし、これをつきあげ、国労の戦闘性をつきあげる位置にはストライキをうちぬく力量をたくわえてきた労働者大衆に依拠した国労・動労の青年部がある。国鉄青年労働者は、一昨年末のベトナム侵略阻止、米タン阻止の全面的基地包囲、新宿駅占拠闘争、あるいは学園占拠闘争の衝撃のもとに、反合闘争の中に独自の米タン輸送拒否闘争をすえることにより、七〇年安保粉砕闘争への展望を自らの闘いに課するにいたっている。こうした動向は、たしかに職場の戦闘力―非妥協的攻撃にたいする職場叛乱の広汎な芽となっている。

だが青年部が、合理化反対闘争を通じて、労働者の意識変革を強調し、階級としての闘いの形成をとき、これを現在の「街頭政治闘争」に対しての反戦青年委員会の職場の闘いとして強調するとき、そこでは必ずしも、現在の資本攻撃、資本支配の強化が必然化している労働者大衆の職場叛乱の胎動に依拠しているとはいえない。まして学生運動が、その平和時の「自治会」運動を脱皮し、「全学共闘」方式により、この叛乱の組織化に成功し、さらにこれを全国化するにいたっている本質を見抜いてはいない。すなわち、反戦青年委員会の中に、大衆のストライキ闘争への決意の組織化を実現する一つの形成を見出し、創意的な大衆行動委員会、ストライキ委員会をもって、組合官僚への真の対決を通して労働組合自体をストライキ機関へと変質させていくことこそが要求されている。だが青年部活動は、現在いぜんとして国鉄労働組合内の組合主義反対派、批判グループにとどまっている。

（四）三・一八ストを闘いぬけ

当面する日本階級闘争の最大の焦点、政府独占の安保攻撃にたいする闘いにおいて国鉄労働者の占める位置は、国鉄労働者の自負するように決定的に重要である。しかもこの攻撃の一環としての大合理化攻撃をうけ、これと闘いながら国鉄労働者は安保粉砕闘争に登場しようとしている。

また国労指導部は、この攻撃の非妥協的性格のために、妥協的取引きのための一般的な条件を狭められ、またそれに反比例する労働者大衆の怒りをまえに、闘争の継続の意志を示している。そして三月十八日には国鉄運賃値上げ阻止のための三時間ストライキを、四月には反合春闘ストライキ闘争を設定している。これが反合闘争を徹底的に闘いぬくものとして追求されていないとはいえ、こうした闘いを通じて国鉄労働者は急速にこの闘いの意味を深め、その階級的力量を深めている。この力は今や国労指導部の方針と鋭い矛盾を露呈しつつある。

そして国鉄労働者反合闘争の勝利的展望は、いまやこうした労働者が明確な政治的展望の下に、真に下からの自主的な闘争機関をつくりだすことにかかっている。

だが国会解散、総選挙に七〇年闘争の決定的比重をおいている社会党、共産党は、政府独占の安保攻撃に有効な闘を組織しえぬまゝあるいはこれを放棄し、この国鉄労働者の三・一八闘争によりかかり、国労指導部の″条件闘争″″市民共闘″方式と連帯し、合理化闘争の本質の隠蔽に手をかしている。特に日共は新宿闘争に恐怖し、反戦青年委員会の抬頭をおそれる民同幹部に謝辞をおくるなど真の闘いへの敵対を労働戦線にもちこむことにやっきになっている

いまや労働戦線においても、こうした組合官僚と、堕落した敵対物日共との対決をぬいて、闘いの前進はありえない。それゆえに国鉄労働戦線において左派として登場し、その力量をつよめつつある青年労働者が、真に自主的な闘いの機関を拠点においてつくりだしこれをストライキ闘争の中核として全国に波及することこそが重要である。

三・一八ストライキを四月沖縄闘争の突破口とせよ!!
三・一八ストライキを大衆的職場叛乱の突破口とせよ!!